

ITP-EUROPA 派遣報告書

博士後期課程 横田さやか

派遣期間 平成 24 年 9 月 16 日～平成 25 年 3 月 31 日

派遣先 ボローニャ大学（イタリア）

指導教員 和田忠彦教授

受入教員 エレナ・チェルヴェッラーティ教授
(Elena Cervellati)

研究テーマ イタリア未来派の舞踊

研究内容

1909年の創立宣言によって生まれたイタリアの前衛芸術運動である未来派が創作した舞踊を研究の対象としている。とりわけ、Aerodanza「航空ダンス」(1931年)を踊ったバレリーナ、ジャンニーナ・チェンシ(Giannina Censi 1913-1995)に注目し、その作品を通じてモダン・ダンスの歴史に於ける未来派ダンスの位置付けと重要性を考察する。

派遣期間中の研究成果

報告者は、2010年度より ITP-EUROPA 派遣のもと、共同学位授与制度に則してボローニャ大学博士課程映画・音楽・演劇専攻に在籍している。派遣期間を通して本学指導教員和田忠彦教授に指導を仰ぎ、ボローニャ大学では今年度も引き続き、舞踊史を専門とされているエレナ・チェルヴェッラーティ教授に師事した。

前年度同様、大学院博士過程演劇専攻のセミナーを通じて知識を深めること

に努めたが、今年度は出席を最小限に留めた。今年度派遣を通しての主な研究活動は、博士論文執筆作業のみに絞られた。

2012年9月の派遣開始と前後して博士論文執筆作業がいよいよ加速された背景には、まず、派遣開始前に応募を済ませていたひとつの研究論文が順調に結果を出したことが挙げられる。発表媒体は、イタリア国内でのダンス・スタディーズの基盤を築かれた元ボローニャ大学教授、エウジェニア・カジーニ・ローパ(Eugenia Casini Ropa)教授が編集されている、ボローニャ大学公認オンライン学術誌“Danza e ricerca”『ダンスと研究』である。研究論文発表にあたっては、どの学会誌もそうであるように、執筆者、査読者ともに名を伏せ公平性を徹底した査読を通過しなければならない。それはつまり、他の研究者らとは文化的地理的に全く異なる土壌から問題に対峙しているという報告者の抱える背景が考慮されないという、理想的な条件の下に審査されることを意味する。学術誌『ダンスと研究』の査読者には、イタリアの舞踊、演劇研究者が名を連ねており、執筆者名の伏せられた報告者の応募論文が評価され査読を通過したという事実は、決して多様性へ開かれているとはいえない研究環境において、発表論文の業績以上の意味をもつことだといえる。それ以上に有意義であったことは、査読者からの丁寧なコメントと、今後の研究発展のための、有意義な指摘をいただいたことである。発表論文は、博士論文の中心テーマとなる、ジャンニーナ・チェンシの未来派ダンスを論じたものである。*Il corpo danzante del futurismo: storia dell'aviazione e tentativo di volare danzando*（「未来派の踊る身体—飛行の歴史と飛び、踊る、試み—」）と題し、未来派も追いつけた飛行技術発展の歴史に則して、常に飛翔することを希求してきた舞踊の歴史のなかに未来派ダンスを考察した。2012年11月に発行、“Danza e ricerca”『ダンスと研究』第3号に掲載された(URL アドレス:<http://danzaericerca.unibo.it/>)。

研究成果としては、研究論文発表に続き、国際シンポジウムにおける研究発表が挙げられる。本学との共同開催による、ドイツのヒルデスハイム大学に於ける国際シンポジウム(Kultur im Spiegel der Wissenschaften)に参加し、研究発表をさせていただいた。報告者の研究発表は、*Il corpo danzante della danza futurista, dell'Ausdruckstanz e del Butoh*（「アヴァンギャルドの踊る身体—未来派ダンス、表現主義ダンス、舞踏」）と題し、イタリア未来派のダンス、ドイツ表現主義舞踊、日本の前衛舞踊「舞踏」を巡りながら「踊る身体」について考察することを試みた。これら三つの舞踊はそれぞれに全く異なるダ

ンスであり、なんら共通の「様式」をもたないと同時に、実際には、共鳴し合い、反応し合っていることが実に興味深い点である。この着眼点については、未来派ダンスを論じる博士論文の中でも取り上げている。

派遣期間、7ヶ月弱を通じて、*La danza nel futurismo: Giannina Censi e la danza moderna*(『未来派のダンス—ジャンニーナ・チェンシとモダン・ダンス—』)と題した博士論文の執筆作業に専念したが、現時点で、第一章を脱稿し、第二章の途中までの執筆を終えている。本学指導教員とボローニャ大学指導教員のご指導を仰ぎながら執筆を進めている。博士論文は、修士課程から継続するテーマへの関心と、2010年度に開始したITP-EUROPA派遣期間に遂行した調査分析作業の成果を書き表す作業そのものである。地道な資料調査作業、研究所の精読作業を積み重ねてきた結果、ようやく、自らの視点を論文に展開できることに、これまでに感じることのなかったやり甲斐を実感する。この博士論文脱稿へ向けて、2013年度も改めて派遣していただくことになっているが、博士論文完成と口頭審査通過という目標を、次年度で達成することこそが、2012年度派遣の成果であるとも考えている。

最後に、歴史あるボローニャ大学において充実した研究生活を送れるよう支えてくださった東京外国語大学指導教員和田忠彦教授、ボローニャ大学指導教員エレナ・チェルヴェッラーティ教授をはじめ、ITP-EUROPA関係者のみなさまに、この場をお借りして改めて感謝の意を記したい。ありがとうございました。